*Silas Marner*における言語の機能

池園　宏

I

Walter Allen が "a myth of spiritual rebirth"[1] と称した *Silas Marner*(1861)の主要テーマの一つは、言うまでもなく主人公 Silas Marner の「変身」(metamorphosis)である。Silas は生涯二度にわたってその人生観を根底から覆されるほどの出来事に遭遇し、多大な精神的変貌を遂げる。一つ目は親友の裏切りによって無実の罪を着せられ絶望に陥った Lantern Yard での事件、二つ目は Eppie の出現によって人間性を回復することになった Raveloe での事件である。作者 George Eliot はこの小説の目的について、"it sets—or is intended to set—in a strong light the remedial influences of pure, natural human relations"[2] と述べている。彼女がロマン派詩人 William Wordsworth を敬愛していたことはよく知られているが、批評家の多くが指摘するように、上記の言葉は作品のコンセプトがまさしく Wordsworth 的であることを示している。[3] このことは、小説冒頭に付されたエピグラフが彼の詩 "Michael" から採られているからも明らかである。"A child, more than all other gifts / That earth can offer to declining man, / Brings hope with it, and forward-looking thoughts"[4] というエピグラフは、精神的枯渇状態に陥った老 Silas が幼子 Eppie によってより良き方向へ「変身」を遂げるという小説の構図そのものを示す。もちろん、Eliot の言う「純粋で自然な人間関係がもたらす救済的影響力」とは、後に議論するように、Eppie のみならず Silas を取り巻く Raveloe 社会の住人たちによるものも含まれている。

小論では、このような絶望と救済の両方を経験する Silas の変身の過程において、発話や対話といった人間の言語行為がどのような役割を持つのかという点に着目し、作品の分析を行う。言語は人間に与えられた固有の能力であり、また対人関係を基盤とした社会生活を営む上で不可欠な要素である。そして、Silas の人生における転落と再生のプロセスには、言語の喪失と回

復のプロセスが深く関わり合っている。ここで言う言語とは、決して Silas 一個人内にのみ限定、収斂される問題ではない。彼の言語使用のあり方、及びそれによって生じる人生の方向性は、周囲の人間たちの様々な発話行為によって少なからぬ影響を受けている。またこれに加えて、ダブルプロット仕立てとなっているこの小説のもう一人の主要人物 Godfrey Cass の言語行為も、議論すべき重要な要素を含んでいる。Godfrey は Silas の "parallel character" として設定されている人物である。対置的に配された両者の言語に対する関わり方を比較対照させることで、この小説における言語行為の意味が重層的に浮き彫りになると考えられる。以下、Silas を中心としつつ、作品中における言語の持つ意義について考察したい。

II

まず最初に、物語冒頭に描写された Raveloe における Silas の孤独な状況、並びにその発端となった Lantern Yard での事件を、言語や対話の視点から考察してみよう。読者が最初に印象づけられるのは、Raveloe における Silas の異常性、あるいは周囲から異常視され続けているという現実である。この異常性の設定の背後には、"her childish recollection of a man with a stoop and expression of face that led her to think that he was an alien from his fellows"[5] という、物語を着想するきっかけとなった作者自身の幼少期の記憶がある。Eliot は、迷信深い当時の人間が特定の知識や才芸に秀でた得体の知れないよそ者に対して不審の目を向けていたという一般論を提示し、その後 Silas の特異な人物像に言及していく。だが、彼が Raveloe の住民から異端視される要因の一つとして看過できないのは、彼が言葉を発しない点、そしてそこから生じる周囲との意思疎通の欠如である。Raveloe に移住して15年、Silas は仕事以外ではめったに口を開かぬ寡黙な人間としての評価が定着している。機織り機の怪し気な響きに惹かれておずおずと近寄ってきた子供たちを追い払う際、彼の採った手段は言語によるものではなく、"a gaze that was always enough to make them take to their legs in terror"(6) という無言の威嚇である。さらに、彼の異常性を印象づける他の原因としては、持病の強硬症 (catalepsis) が挙げられるだろう。この不可思議な病には解釈の余地が様々あるが、その一つとして、言語の機能が奪われた身体的状態という捉え方ができるのではないだろうか。戸外でこの病に陥った彼は、もぐら捕りの Jem Rodney にその異様な姿を目撃される。正気に返った Silas は、

自らの症状に対して何の言明をするでもなくその場を去る。この不可解な行動は、他の要因とも相俟って村人に根拠のない憶測を生む土壌を与え、Silas を等閑視するさらなる流れへと拡大していく。Jem から報告を聞いた教区執事 Macey は、その話からの連想で Silas の謎めいた他の行動について言及し、最後に "but he was worth speaking fair, if it was only to keep him from doing you a mischief"(9) という警告を発する。これは Silas との積極的な対話を回避する村人の言葉の典型的な例であると言えよう。

さて、Silas の強硬症は以前暮らしていた Lantern Yard において既に表れている。この病気、並びにそれに伴う言語機能の停止が、彼の人生を左右する事件の発端となる点に着目したい。Lantern Yard は "gifts of speech"(9) があれば平信徒でも頭角を現すことのできるような宗団の地域だと描写されている。熱心な信仰生活を営み、周囲から重用された当時の Silas には、「弁舌の才」が備わっていたことが十分に推察される。その彼が強硬症を発端として無実の罪を着せられ、転落の人生を歩み始めるのは極めて示唆的である。病床にある教会執事のために寝ずの番をした際、Silas は突如発作に襲われて意識を失い、その間に教会の金が盗まれてしまう。金が保管されていた机の中からは彼のナイフが発見された。事件について尋問を受けた彼は、自分のナイフが親友 William Dane によって所持されていたことに思い当たる。一旦は告発しようとするものの、ここで結局 Silas が口をつぐんでしまう事実は注目に値する。この行為は、友人の裏切りの言葉を耳にしたショックと、神は全てを分かってくれるはずだという信仰心とに基づくものであった。だが同時に、この時の "I can say nothing"(13) という Silas の言葉は、彼が無実を主張する機会を自ら放棄してしまったことを意味している。強硬症自体は偶発的な現象であるが、自己弁明の権利を放棄するのは自らの意志による選択的行為なのだ。自由意志による個人の選択を重視する Eliot 作品において、この Silas の行動は重大な意味を持っているのである。

その後の Lantern Yard の裁きは、籤という特異なやり方によって行われる。これは、神の判断という名のもと、口頭による法的議論が封じ込められた状態であると解釈できよう。罪の裁きが下った後、Silas は眠りから目覚めたように William の容疑を口にし、自己の無実の申し立てを行う。だが時既に遅く、彼の発言は実質的な効力を失っている。この不当な裁きの結果、最終的に彼の信仰心までが奪われてしまう。そこで発せられる不敬な言葉 "there is no just God that governs the earth righteously, but a God of lies, that bears witness against the innocent"(14) は、それまで Silas が何度

も口にしていた "God will clear me"(12)(13)という信仰心溢れる言葉を根底から覆すものである。虚偽の発言によって人を欺く親友と、無実の者に無言で罪を宣告する「嘘つきの神」への不信が、Silas を絶望状態に陥れる。人間と神の両者に対する不信のため、翌日から Silas は一人黙々と機織りに精を出す。教会関係者が Silas の婚約者 Sarah の婚約破棄を告げに訪問するが、彼はそのメッセージを「無言で(mutely)」(14)受け取り、再び機織り機に向かうのだ。このように考えれば、その後 Raveloe に移住しても固執し続けた機織り機、及び機を織るという行為には、彼を言語活動から遠ざける機能が付与されていると解釈することができる。その後の Silas の対話は、機織りによって得られる無機質な金貨との対話のみとなり、それによって彼はますます孤独な沈黙状態に陥っていく。他者との対話を拒絶する Raveloe での孤立した状況は、他者によって言語行為を封じ込められた Lantern Yard における事件と密接に結びついているのだ。

Ⅲ

これまでの議論で、Silas の転落には言語の喪失や放棄が深い関わりを持っていたことが確認された。だとすれば、彼の精神性の復活には、当然ながら発話行為の回復が伴っているはずである。ここでは、周囲の人間との言語的接触と Silas の再生との関係を明らかにしていきたい。Raveloe の住人と積極的な繋がりが生じる契機となるのは、Silas の金が消失した事件、並びに Eppie が Silas の家に出現した事件の二つである。両者に共通するのは、Silas が個人の判断力の限界を超えた不可解な事象に直面し、それに関する助言や救いを自ら求めているという点、さらにそこには他者との直接的対話という言語活動が伴っている点である。どちらの場面においても、現れた Silas に対する村人の最初の反応は驚愕に満ちたもので、まるで "apparition" (55)(114)を見たかのようだと描写されている。これは両事件が Silas に与えたショックの大きさを物語る外面描写だが、その一方で、亡霊のような Silas の異常さをことさら強調する村人の反応には、両者の日頃の断絶ぶりが反映されている。Silas と村人の対話プロセスはどのような形で展開するのであろうか。

最初に Raveloe の村人の日常的な言語活動の様子について考察しておきたい。それが最も端的に表れているのは、Leslie Stephen が "the best specimen of her [Eliot's] humour"[6] と賞賛した、小説第6章における村人同

士の活発な長談義の場面であろう。前述のJemとMaceyの議論は第1章に登場するが、この短い対話が第6章にそのまま繋がる形となっていることは、この場面の舞台となった酒場the Rainbowにこの二人が同席している点からも明らかである。第1章の会話の場所は明記されていないものの、おそらくは同じ酒場だったと推察される。さて、小説全体の構成から考えると、この第6章はプロットの進展自体にはあまり直接的な関わりがない。また、そこで展開される対話は、噂や迷信に基づいた粗野で荒唐無稽なやりとりが多い。注目すべきは、この章の大半が語り手による地の文ではなく、村人たちの会話文によって成立している点である。それはこの酒場がRaveloeのコミュニケーションの中心地であり、コミュニティーの核となる場であることを暗示している。酒場に登場する副次的人物たちは小説における“chorus”の役割を担っており、[7] 村の世論はそこでの“the ritual of debate, argument, disagreement and reconciliation”[8]によって形成されるのだ。そして、続く第7章においてSilasが酒場に姿を現して助言を受けるのは決して偶然ではなく、作者によって施された巧みなプロット展開であろう。重要なのは、Lilian Haddakinも指摘するように、SilasがRaveloeにおいて直接話法の会話体で発言するのは、この第7章が初めてだという点である。[9] それまでのSilasの内面は、もっぱら語り手による外部からの視点によって描写されていた。この第7章は、これまで言語的接触を回避してきた村人との最初の直接的対話の場面となっているのだ。

酒場に辿り着いた時点でのSilasはまだ自己の殻に閉じこもった状態で、Jemに対する非難の言葉を一方的に発するばかりである。だが、村人たちの利他的行動や慰めの言葉は、Silasの言語活動を再開、再生させるための機会を提供する。逆上したSilasに対して、酒場の亭主は“if you've got any information to lay, speak it out sensible, and show as you're in your right mind, if you expect anybody to listen to you”(56)と理性的な発話を奨励する。村人たちから様々な質問を受けつつ一部始終を語るの際のSilasの反応は、以下のように記されている。

> This strangely novel situation of opening his trouble to his Raveloe neighbours, of sitting in the warmth of a hearth not his own, and feeling the presence of faces and voices which were his nearest promise of help, had doubtless its influence on Marner, in spite of his passionate preoccupation with his loss. (57)

15年もの沈黙を破り、初めて自己の内面を他者に打ち明ける行為が、Silas に確実な変化をもたらしている。その後の対話により、Silas は Jem への疑いが過ちだったことを悟る。自己の非を認める直接のきっかけとなったのは、"let's have no accusing o' the innicent"(57) という Macey の言葉である。この言葉は無実の罪を着せられた Lantern Yard での苦い体験を Silas に思い起こさせ、"I was wrong, . . . There's nothing to witness against you, Jem. . . . I don't accuse you—I won't accuse anybody"(58) という謝罪の言葉を引き出す。ここで重要なのは、忘却していた過去の記憶、並びに喪失していた従来の良心や人間性を回復する Silas の精神的プロセスの初期段階が、周囲の人間からの直接的な進言によって誘発されているという事実である。

この後、村人たちは Silas のために村中を捜索するという無私の行動を起こす。結局盗まれた金は発見されないままだが、その間村人の間では徐々に彼への猜疑心という精神的障壁も払拭されていく。人々は Silas に対して好意的に接するようになり、それに比例して彼との間に積極的な対話が生まれていく。

> Neighbours who had nothing but verbal consolation to give showed a disposition not only to greet Silas and discuss his misfortune at some length when they encountered him in the village, but also to take the trouble of calling at his cottage and getting him to repeat all the details on the very spot . . . . (77)

事件解決に関しては無力な村人も、意識的に Silas に対話を持ちかけ、相手から言葉を引き出すことによって互いの距離を縮めていく。また、それまでは頑固に村人との交流を避けていた Silas も、不十分ながらも彼らの言葉に耳を傾けるようになる。金への執着は Silas を孤独へと陥れるものだったが、逆にその喪失は彼に発話の機会を与え、孤独の状態から解放してくれるのだ。村人の中でも饒舌な Macey は、教区執事の立場から Silas に教会へ来るように勧める。教会もまた the Rainbow と並んで人が集う Raveloe 社会の核たる場であり、[10] そこではさらに多くの発話機会が期待される。Macey と同じく教会訪問を勧める人物としては Dolly Winthrop がいるが、彼女の影響力については別に詳しく議論する。

次に、Eppie 出現後の Silas の発話行為について考察してみよう。この

場面におけるSilasはより積極的に発言し、また周囲の発言に対して肯定的な反応を示している。まずSilasとEppieの最初の対話に着目してみたい。Silasの家の炉端で眠っていたEppieが目覚めて発した最初の言葉 "mammy" を聞いたとき、Silasは "Silas pressed it to him, and almost unconsciously uttered sounds of hushing tenderness"(111)というように思わず声を発して対応し、即座に世話を始めている。同じく "mammy" というEppieの声に導かれる形で母親Molly Farrenの遺体を発見したSilasは、医者を求めてCass家へ向かう。他者の助力を求めるこの能動的行為が、金貨喪失事件により芽生えていた村人への信頼感を基盤にしたものであるのは言うまでもない。名士Cass家の屋敷the Red HouseはRaveloe上流社会の象徴的存在であるが、大晦日恒例のパーティーの際には村のあらゆる階層の人間が集う。第11章で展開されるパーティー当日の老若男女の様々な会話は、the Rainbowにおけるそれと同じく、物語のコーラス的機能を果たしている。その真只中へ自ら飛び込んだSilasの行動の意味はもはや自明であろう。さて、Silasは赤ん坊をその場に置いていくようにと勧めるMrs Kimbleの助言に対して強く反駁するが、この時の彼の様子は以下のように記されている。

> "No—no—I can't part with it, I can't let it go," said Silas, abruptly. "It's come to me—I've a right to keep it."
>
> The proposition to take the child from him had come to Silas quite unexpectedly, and his speech, uttered under a strong sudden impulse, was almost like a revelation to himself: a minute before, he had no distinct intention about the child. (115)

その後もSilasはGodfreyに対して同じ主張を繰り返し、結果的にEppieを引き取ることに成功する。SilasとEppieの未来は、沈思黙考ではなく、彼の「啓示」にも似た衝動的なとっさの発言によって決定づけられることになるのだ。このエピソードは、人間の人生を左右する言語の潜在的威力を示すものだと解釈できる。

Eppieの出現は、Silasと村人との言語的距離を縮める役割を果たす。彼はどこへ行くにもEppieを連れて行き、人々の関心の的となる。注目したいのは、"a useful gnome or brownie—a queer and unaccountable creature, who must necessarily be looked at with wondering curiosity and repulsion"(130)というように、絶えず奇異な非人間的存在としてのみ見られ

ていたSilasが、人並みの満足や苦労を背負った人間として周囲の理解を得られるようになる事実である。既に議論したように、Silasの特異性はその頑な沈黙によって生じる周囲の誤解によって増幅していた。同行するEppieの話題を媒介として、彼と村人との対話の機会は増加する—"Everywhere he must sit a little and talk about the child, and words of interest were always ready for him . . . ."(130) また、以前はSilasに怯えて近寄ろうとしなかった子供たちにも変化が表れ、Eppieがそばにいることで彼の存在を怖がらなくなる。これ以降の歳月においてSilasと村人たちとの関係が修復されえたことは、小説第2部冒頭で描写される16年後のSilasの姿に明白に示されている。そこでの彼は、コミュニティーの場である教会での礼拝を終え、村人たちと一緒に現れ出てくるのだ。また、同じく教会から出てくるSilasと、彼を温かく取り巻いて談笑するRaveloeの人々の様子が描かれる結末のEppieの結婚式は、両者の対話の成就を象徴的に示すエピソードだと解釈できよう。Henry Austerが分析するように、この結婚式は"the long-delayed integration of the alien weaver into the community"を祝福する場面でもあるのだ。[11]

Ⅳ

以上のように、Silasの精神的蘇生にはRaveloe社会との言語的接触が重要な意味を持っている。ここで、村人の中でも特に際立った存在として描かれているDolly Winthropに焦点を当ててみたい。彼女はSilasと最も多く言葉を交わして影響を与える人物であり、とりわけその独特な饒舌ぶりが読み手の注意を引く。彼女は金貨喪失事件により意気消沈したSilasを言葉巧みに慰め、またEppieの養育に関しては次々に助言を施す。注目すべきは、Dollyの畳み掛けるような饒舌がSilasから対話を引き出す役割を担っているという点である。最初はDollyからの一方通行の会話ばかりであったが、無口だったSilasも徐々に反応を示し、発話の機会が増加する。出版者John Blackwoodが"a jewel in every sense"[12]と絶賛したDollyの発話行為がSilasに及ぼす影響について検証してみよう。

Dolly自身が"I'm no scholard, and I'm slow at catching the words"(124)と認めるように、彼女の性質は知的なものでも理解力に富んだものでもない。その話しぶりは方言丸出しで、脱線したり、同じ言葉を何度も繰り返したりする粗野なものである。だがその根底にあるのは、素朴なキリスト教信

仰や隣人愛に基づく利他的精神である。それは基本的に、Silas の災難を聞きつけて助力を差し伸べた他の村人たちの善意と同質のものであると言えよう。もっとも、Raveloe は全体的にそれほど宗教心の篤い風土ではなく、また Silas の麻痺した信仰心を呼び覚ますほどの言葉を語れる人はいないと記されている— "There were no lips in Raveloe from which a word could fall that would stir Silas Marner's benumbed faith to a sense of pain."(16) その中にあって、神への信仰や教会行きを根気強く説き続ける Dolly の存在感はひときわ大きい。だが、金貨喪失事件直後における彼女の忠告は、ショックから脱しきれない Silas の耳へは容易に届かない。興味深いのは、彼の理解を妨げる要因の一つが、彼女の言葉の誤用にある点である。神に言及する際、ぶしつけな馴れ馴れしさを恐れるあまり、Dolly は習慣的に複数形代名詞の "Them" を用いる。この信仰心溢れる呼び方が、皮肉にも Silas の混乱を引き起こす結果となっているのだ。他方、沈黙を決めこむ Silas 自身の内面については以下のように記されている。

> He remained silent, not feeling inclined to assent to the part of Dolly's speech which he fully understood—her recommendation that he should go to church. Indeed, Silas was so unaccustomed to talk beyond the brief questions and answers necessary for the transaction of his simple business, that words did not easily come to him without the urgency of a distinct purpose. (84)

教会行きに関する Dolly の助言自体は理解していたものの、Silas には機織りに関連する事務的な言葉以上の言語活動を受け入れようとする意志が働かない。ここでも、機織りが能動的な言語行為を阻害する媒体となっていることが改めて示されている。Dolly の "when your loom makes a noise, you can't hear the bells"(82) という警告の言葉は、それを裏付けるものであろう。ここには、会衆が集って牧師の説教を聞いたり賛美歌を歌ったりするコミュニケーションの場としての教会の鐘と、Silas を孤独へと埋没させる機織りの音とが対比的に提示されているのだ。これに関連して、Dolly が幼い息子 Aaron にクリスマスキャロルを歌わせる場面も見逃せない。彼女は "a voice like a bird"(84) を持つと自慢する息子の聖なる調べが Silas を教会へ誘う手助けになると考え、Silas を前にして怯む Aaron に半ば強制的に歌を歌わせる。結果的に彼女が期待したような効果は得られなかったものの、

Silas は感謝の気持ちとして Aaron にお菓子を差し出す。小説のエピグラフに示された子供による大人の救済という Wordsworth 的主題、並びに成長した Aaron が Eppie と結婚する小説の結末を考え合わせると、この場面で Aaron の発した歌声、並びにそれを後押しした Dolly の功績は決して小さなものではない。

Eppie の登場以降、饒舌な助言役としての Dolly の役割はさらに増加する。彼女は Eppie の養育方法や躾について直接的なアドバイスを与え、Silas はこれらを積極的に受け入れる。また、Dolly は教会における Eppie の洗礼式を勧める。洗礼名をつける必要性を説かれた際、Silas は母と妹が聖書に出てくる "Hephzibah" という名前だったことを告白する。これは Raveloe に来て以来、彼が自身の過去について口外する初めての場面である。また、洗礼式のため初めて Raveloe の教会に出向いた彼と村人との間には、次第に新たな交流と対話が生まれていく。Dolly との対話は、失われた過去と再び向き合う機会と、失われてしまうはずだった未来を未然に修復する機会とを Silas に与えているのだ。この後、"as it grew more and more easy to him to open his mind to Dolly Winthrop, he gradually communicated to her all he could describe of his early life"(143) というように、徐々にではあるが Silas は Dolly に自分の忌わしい過去の歴史について語っていく。その彼に対して Dolly が説くのは、敬虔な信仰やこの世の善性についての素朴な信念である。

> . . . eh, there's trouble i' this world, and there's things as we can niver make out the rights on. And all as we've got to do is trusten, Master Marner—to do the right thing as fur as we know, and to trusten. For if us as knows so little can see a bit o' good and rights, we may be sure as there's a good and a rights bigger nor what we can know —I feel it i' my own inside as it must be so. (145)

これは小説中 Dolly が発する饒舌な台詞の中でも最も長いものの中に登場する一節であり、作者が最も力点を置いている箇所だと考えられる。この Dolly の忠言に対する Silas の反応は、"There's good i' this world—I've a feeling o' that now; and it makes a man feel as there's a good more nor he can see, i' spite o' the trouble and the wickedness"(145) という極めて従順なものである。ここで重要なのは、その内容自体もさることながら、両者の

言葉遣いが非常に類似したものであるという点である。以前は Dolly の話す宗教談義を理解することすら困難だった Silas が、ここでは彼女の発言内容を適確に把握し、模倣反復できるまでに進化しているのだ。R. T. Jones は以下のように指摘する。

> Finding himself, after fifteen years of mere existence, involves for Silas something like learning a new language; he has to learn to understand Mrs Winthrop's way of talking, and this is only a part of learning what life means in Raveloe.[13]

Silas の人間的再生は「新たな言語」を獲得するプロセスと軌を一にし、Dolly の言語の理解は Raveloe 社会の一員として生きる意味の把握へと繋がる。Silas は作者の代弁者とも言うべき Dolly の言葉を受け入れ、反復し、実践することで、共同体における自己のあり方を認識、確立していくのだ。後に Silas は Lantern Yard を再訪し、かつての街並が消失してしまった事実を Dolly に語って聞かせる。ここで彼が発する最後の言葉は "I think I shall trusten till I die"(180)である。ここにも上記 Dolly の教えが忠実に受容され、反復されていることが分かるだろう。これは物語における Silas の最後の言葉でもあるのだが、それは同時に、両者の共感に満ちた対話の到達点でもあるのだ。以上議論してきたように、Dolly の言語は Silas の言語活動、延いては人間性の回復にとって不可欠の媒体となっているのである。

V

ここで Silas のパラレルキャラクターである Godfrey に議論の焦点を移し、その言語に対する関わり方を検証したい。ポジティブな言語使用によって精神的再生を成し遂げる Silas とは対照的に、Godfrey の言語行為にはネガティブな側面が多く見出せる。Godfrey の性質で特徴的なのはその優柔不断さであるが、それは彼の思考や行動のみならず、言語活動においても当てはまる。彼は行うべき発言を躊躇、拒否したり、発言の時期を逸したりというパターンを繰り返し、それが結果的に人生における不幸へと繋がっている。Godfrey の言語行為の是非を、Silas と同じく、周囲の人間たちとの関係の中で明らかにしてみよう。

Godfrey の登場が家族との対話の場面で始まる事実は重要である。それ

は村人との対話から疎遠な Silas の登場シーンとは一見対照的である。しかし、Godfrey の対話は家族愛に溢れたものからはほど遠い。彼が発する第一声は、弟 Dunstan に対する強い不満と非難の言葉である。その後両者の間には、Dunstan の金銭浪費についての Godfrey から脅し、そして Godfrey の情婦 Molly についての Dunstan からの脅しというように、肉親を罵倒する言葉の応酬が繰り広げられる。双方に共通するのは、Godfrey の "if you begin telling tales, I'll follow"(26)という威嚇に表れているように、相手の自由な言語使用を牽制し妨害ようとする口封じの行為である。Godfrey は売女との秘密結婚という罪を自ら父に白状しようかと再三迷うが、生来の優柔不断な性質のため、結局はそのまま黙秘を続ける道を選ぶ。彼の沈黙を決めこむこの姿勢は、後に Eppie が出現した際にも繰り返され、最後にはその報いを受けることになる。一方、Dunstan は兄を脅して譲り受けた馬を高値で売り飛ばそうと周囲へ声高に吹聴したあげく、過ってその馬を死なせてしまう。金策の手立てをなくした Dunstan は Silas の家へ向かい、強盗行為に至る。この間彼は一言も言葉を発することなく、また彼の一連の行動や心理は全て語り手によって外側から描写されるのみである。この直後 Dunstan は石切り場に落下して命を落とし、結果として彼が言葉を発する機会は永久に失われる。以上のように、二人の兄弟には他者との対話や言語の誠実な使用を拒み、それが最終的には自らの破滅を招くという共通した傾向が見受けられる。

次に、Eppie の出現時における Godfrey の言語的反応を考察してみよう。Eppie を連れた Silas が現れたとき、Godfrey は雪中に倒れた Molly が死んでいないかもしれないという恐怖感に駆られる。それは彼女の口から秘密が暴露されるのを恐れたためである。弟に対する姿勢と同様に、Godfrey は Molly の言語をも封印したいと考えるのだ。この時点で幼子の Eppie がまだ言葉を話せないのも、彼にとっては好都合な状況だと言えよう。そして、Eppie を引き取って育てると主張した Silas とは対照的に、彼の決意に乗じる形で、Godfrey は沈黙によって真相を隠し通す決意を固める。このような利己的姿勢に対して、Eliot は一般論の形で以下のような批判的コメントを付している。

> The prevarication and white lies which a mind that keeps itself ambitiously pure is as uneasy under as a great artist under the false touches that no eye detects but his own, are worn as lightly as mere

trimmings when once the actions have become a lie. (119)

言い逃れや嘘といったネガティブな行為は発話する当人に不安を与えるものであるが、一旦行ってしまえば軽々しく身に纏えてしまう。このようにして罪の意識を葬り去った Godfrey は、Molly の問題のために躊躇していた Nancy への求婚を決意する。ここでの彼の言い分は、"Where, after all, would be the use of his confessing the past to Nancy Lammeter, and throwing away his happiness?—nay, hers?"(119)という身勝手なものである。過去の過ちについて発言しないことこそが自分や相手の幸福に結びつくというのは都合のいい自己弁護に過ぎず、ここには彼のエゴイスティックな性質や道徳的鈍感さが明確に表れている。

このような過去への沈黙は、Godfrey の未来に取り返しのつかない代償をもたらす結果となる。16年後、子宝に恵まれぬ Godfrey は意を決して Eppie を養子に引き取ろうとする。だが、Silas と Eppie の強固な反対に遭って、彼はその試みを断念せざるをえなくなるのだ。世継ぎ問題に苦悩する彼は、その6年前にも養子縁組の話を Nancy に持ちかけていたが、妻からの賛同は得られなかった。その Nancy が彼の提案に納得できたのは、Eppie が自分の実の娘だという真実を Godfrey から告白されたためである。このプロセスにも、他者の心理に作用する発話行為の影響力が示されているわけだが、Godfrey の告白には留意すべき点がある。彼が告白に至った直接の原因は、Dunstan の死体が発見され、Silas の金貨を盗んだ犯人が弟であった事実が判明したためである。だが、この一件と Eppie についての告白との間には直接的な繋がりはなく、彼の行為は不自然のようにも思われる。この点に関して、Kerry McSweeney は "One learns nothing about the psychological circumstances that have led Godfrey to break his long silence" と同様の指摘をしている。[14] Eppie の秘密を Nancy に暴露する直前の Godfrey の言葉を見てみよう。

> But I came back to tell you: there was no hindering it; you must know. . . . Everything comes to light, Nancy, sooner or later. When God Almighty wills it, our secrets are found out. I've lived with a secret on my mind, but I'll keep it from you no longer. I wouldn't have you know it by somebody else, and not by me—I wouldn't have you find it out after I'm dead. I'll tell you now. It's been "I will"

and "I won't" with me all my life — I'll make sure of myself now. (162)

Godfrey が長年の沈黙を破って秘密を口外する必要に迫られたのは、第一には全知全能の神に対する畏怖という宗教的理由のためである。しかしここで重要なのは、自己の秘密の告白を行うのは他の誰でもなく自分自身でなければならないという責任感、そして過去を精算し未来を切り開くには過去の過ちの言語化と伝達を出発点とせねばならぬという自己認識である。一見不自然にも思える Godfrey の告白には、彼の言語に対する意識の改善が伴われているのだ。しかし、たとえ言葉を発することができても、それが時期を逸しては効力が失われたものとなる。それどころか、遅すぎた告白は、逆に痛烈なしっぺ返しを加えられることになるのだ。次の項では、養子縁組の要求を突きつける Godfrey と Nancy の夫妻と、それを退ける Silas と Eppie の親子の意見の対立を考察する。両者が初めて直接的対話を繰り広げるこの場面では、双方の思惑が絡み合い、その対照的な言語的姿勢が浮き彫りとなっている。

Ⅵ

Godfrey が最初に養子縁組の話に触れた時点での Silas と Eppie の反応は比較的簡潔なものである。Silas は "Eppie, my child, speak. I won't stand in your way. Thank Mr and Mrs Cass"(168) と Eppie の発言を促し、Eppie は即座に養子を断る旨を伝える。だが、Godfrey が真相を暴露し、実の父親としての要求権を口にしたとき、Silas は "then, sir, why didn't you say so sixteen year ago"(169) と激しい反抗心を表面化させる。この言葉には、Nancy が Godfrey から同じ告白を聞いた際の発言 "Godfrey, if you had but told me this six years ago, we could have done some of our duty by the child"(163) に共通する要素がある。いずれも Godfrey の過去の沈黙を批判する発言である。Nancy の場合は妻として夫の自白をすぐに受け入れたが、遅れてきた告白に対する抗議の姿勢は Silas と共通している。Silas は先の言葉の後、Lantern Yard での事件以来封印していた "an accent of bitterness" (169) で、Raveloe ではかつて見られなかったような長く執拗な自己主張を繰り返す。しかし Godfrey との議論が平行線を辿ると、Silas は突如発言を止め、"I'll say no more. Let it be as you will. Speak to the child. I'll hinder nothing"(171) と Eppie の判断に委ねる。この発言は "I can say nothing" と

述べて沈黙し、神に判断を委ねたLantern Yardにおける姿勢とオーバーラップする。だが、かつての沈黙との決定的な違いは、Silasの内には愛情や信頼感を礎としたEppieとの深い絆が存在しているという点である。GodfreyとNancyが訪問する以前の段階で、既にSilasはEppieに自分と彼女の過去について正直に語っていた。それは身内に対して最後まで真実を語ろうとはしなかったGodfreyとは対照的な姿勢であると言える。SilasとEppieの間には、"perfect love"(146)に裏打ちされた嘘偽りのない強固な関係が築き上げられているのだ。

Silasから将来の判断を委ねられたEppieは、長年の愛情に応えて彼のもとに残る決意をする。興味深いのは、その思いをGodfreyに述べる際のEppieの饒舌である。SilasがEppieを引き取った後の16年目を描いた第2部では、彼女の多弁さが際立っている。その発言の頻度や陽気さ、そして影響力の強さは、あたかもDollyの役割を継承したかのように思われるほどである。Dollyと同様にEppieの発言はSilasの発言を引き出し、また彼女の饒舌に比例する形で、彼の言葉も長く多岐にわたるものとなっているのだ。さて、GodfreyにEppieの数々の発言の中で着目したいのは、"And he's took care of me and loved me from the first, and I'll cleave to him as long as he lives, and nobody shall ever come between him and me"(172)という言葉である。この中に出てくる"from the first"という語句は、Nancyが夫から真実を聞いた際の"if we'd had her from the first, if you'd taken to her as you ought, she'd have loved me for her mother — and you'd have been happier with me"(163)の中の"from the first"とオーバーラップする。NancyとSilasの言葉の共通性については先に指摘したが、Nancyの言葉はEppieのそれとも相通じる要素を持っていることが分かる。ここにも、「最初から」Eppieを引き取ることを宣言したSilasと、「最初から」引き取りを拒んで沈黙したGodfreyとの対比が明確にされていると解釈できるのだ。

説得の困難さを悟ったGodfreyは、"unable to say more"(173)と言葉を失った状態でSilasの家を去る。失意の底にある彼にとって、残された救いはNancyの存在である。父権を主張するGodfreyを弁護する側についていた彼女は、Silasの家を去る際、やはり夫の気持ちを察したかのように、"We won't talk of this any longer now"(173)と述べる。帰宅後Godfreyがこの一件を世間には黙っておく意向を告げると、Nancyは従順に同意する。だが、Eppie他の将来に配慮してのこととはいえ、彼らのこの決意が新たな沈黙の始まりとなる事実を見逃してはならないだろう。事の真相は未来永劫に

わたって封印されねばならなくなるのだ。この点から考えると、Godfrey が Eppie の結婚式の日に姿を見せない結末のプロットは意味深長である。彼の不在理由は "for special reasons"(181)としか記されていない。しかし、最後の場面がコミュニティーの中心である the Rainbow での披露宴の席であり、そこに集う村人たちが陽気な会話を繰り広げること、また小説の最後が Eppie の "O father . . . what a pretty home ours is! I think nobody could be happier than we are"(183)という至福の言葉で締め括られることを考えると、それらとは対照的な Godfrey の不在と沈黙の持つ意味は重い。Eliot はこの作品の基調について、"The Nemesis is a very mild one"[15]とコメントしている。確かに、他の作品のエゴイストたちに比べれば、Godfrey に対する因果応報はそれほど厳しいものとは言えないかもしれない。それは、過失を犯してしまった彼が内的葛藤を経て自らの罪を受け入れた真摯な姿勢の反映でもあろう。しかし、これまでの議論で示されたように、発話行為の観点から見た場合、Godfrey の最終的な沈黙はその未来に大きな影を投げかけるものである。それは、沈黙から対話へと移行することによって人間性を取り戻し、幸福に至った Silas とは対照的な姿だと言える。

Ⅶ

以上、Silas を主軸にこの小説における言語行為の諸相を分析してきた。Silas の言語に対する姿勢は周囲の感化を受けながら変化を遂げ、それが彼の「変身」のプロセスと深い関わりを持つ。彼の言語の回復は、社会における人間関係の回復、並びに失われた過去や未来の回復というように、時間空間の両面にわたって重要な役割を果たしている。さて、興味深いことに、Eliot は当初この作品を韻文で書くことを模索し、結果として散文小説の形式を選択した経緯がある。

> I have felt all through as if the story would have lent itself best to metrical rather than prose fiction, especially in all that relates to the psychology of Silas; except that, under that treatment, there could not be an equal play of humour. It came to me first of all, quite suddenly, as a sort of legendary tale, suggested by my recollection of having once, in early childhood, seen a linen-weaver with a bag on his back; but, as my mind dwelt on the subject, I became inclined to a more

realistic treatment.[16]

Eliot のこの判断は、多くの批評家によって妥当なものだと評価されている。その理由を "She was incomparably more gifted as a prose than as a verse writer; her blank verse works of fiction are conscientious, competent and dull"[17]とする Joan Bennett の意見は、その代表的なものである。加えて、*Adam Bede* 第17章その他において Eliot が公言してきたリアリズムの思想を念頭に置けば、「伝説的な物語」を韻文によって綴るよりも、「より写実的な取り扱い」を優先させた Eliot のやり方はまさしく正解だったと言えよう。仮に韻文で書かれていたならば、この作品自体への評価はそれほど高いものではなかったかもしれない。上記引用中にはユーモアの欠如が生じることへの懸念が言及されているが、これは小論で論じてきた言語使用のテーマからも当てはまるものである。Raveloe の村人の生命感溢れる談話、Dolly のコミカルな饒舌ぶり、Silas と Eppie との微笑ましいやりとり等の瑞々しい言語行為は、"the less circumscribed medium of prose"[18] であればこそ効果的かつ適確に描写、提示されることが可能となっているのだ。詩人 Wordsworth は韻文において自己の提唱した主題を具現化したが、Eliot は彼の思想を下敷きにしつつも、彼女ならではの手法によってそれを独自の優れた作品へと昇華、結実させえたのだと言えよう。

注

1. Walter Allen, *George Eliot* (New York: Macmillan, 1964) 120.
2. Gordon S. Haight, ed., *The George Eliot Letters*, vol.3. (New Haven: Yale UP, 1954-78) 382.
3. Allen 119.
4. George Eliot, *Silas Marner* (1861; Harmondsworth: Penguin, 1996) 1. 以下の引用は全てこの版に拠り、本文中に頁数のみを記載する。
5. *Letters*, vol. 3, 427.
6. Leslie Stephen, *George Eliot* (1902; London: Macmillan, 1924) 108.
7. Allen 123.
8. David Carroll, introduction, *Silas Marner* by George Eliot (1861; Harmondsworth: Penguin, 1996) xi.
9. Lilian Haddakin, "*Silas Marner*," *Critical Essays on George Eliot*, ed.

Barbara Hardy (London: Routledge and Kegan Paul, 1970) 63.

10. Pauline Nestor, *George Eliot* (Basingstoke: Palgrave, 2002) 80.
11. Henry Auster, "A Qualified Redemption of Ordinary and Fallible Humanity," *George Eliot: The Mill on the Floss and Silas Marner: A Casebook*, ed. R. P. Draper (Basingstoke: Macmillan, 1977) 226.
12. *Letters*, vol. 3, 386.
13. R. T. Jones, *George Eliot* (Cambridge: Cambridge UP, 1970) 40.
14. Kerry McSweeney, *George Eliot (Marian Evans): A Literary Life* (Basingstoke: Macmillan, 1991) 76.
15. *Letters*, vol. 3, 382.
16. *Letters*, vol. 3, 382.
17. Joan Bennett, *George Eliot: Her Mind and Her Art* (Cambridge: Cambridge UP, 1948) 132.
18. F. B. Pinion, *A George Eliot Companion* (London: Macmillan, 1981) 131.